「片子」に関する試論
― 河合隼雄「片側人間の悲劇」と片子の「子ども性」を手掛かりに ―

西浦　太郎

はじめに

自然科学の発展に伴い、以前は接触する事が少なかった人・物・文化の接触がかつてない規模で進行している。日本の諸地域でも近代国民国家形成以来、西洋文化や自然科学が生活のあらゆる層に浸透し、従来の地域文化や生活様式を保持することが困難になり、日本における諸文化は自らのアイデンティティを問われている。日本文化の異文化への姿勢を知る上で日本に古くから伝わる片子の昔話がある。片子は鬼と人間の間に生まれた半人半鬼の子どもであり、鬼ヶ島から日本に帰ると居づらくなり、その多くが最後に自殺する話である。小松（1987）は異類婚により生じた片子が「日本文化の内奥に潜む複雑な差異体系へと私たちを導いていく素晴らしい案内人」とし、その肯定的側面に注目しているが、河合（1994b）は、半人半鬼である片子が常に死に近い存在であり、片子の日本での「生き辛さ」を述べ、片子を死に追いやり異なる存在を排除する日本文化の姿勢を問題視している。そして、海外との文化接触により自らのアイデンティティが岐路に立たされている日本文化が異質な片子を生かし続ける事の重要性を指摘している。しかし、河合は片子が死に近い存在としながらもその内面で何が生じ、なぜ周囲が片子を生かし続ける事が重要なのか、そして死に近い片子自身の生き方についてはあまり言及していない。これらは片子を考える上で重要な点である為、本論文では帰国（生）子女、ネイティブ・アメリカンの事例を取り上げ、片子の存在について考察を深める。

１．片子の話と片子の死

では、まず片子の話を紹介する。**【事例 1】**（河合は①と記している）「木樵の男が仕事をしていると、鬼が出てきて、あんこ餅が好きかと聞く。男は女房と取り替えてもいいほど好きと答える。そこで、男は鬼のくれたあんこ餅をたらふく食べるが、帰宅すると妻が居ないので驚く。

男は妻を探して、一〇年後に「鬼ヶ島」を訪ねる。そこに一〇歳くらいの男の子が居て、体の右半分が鬼、左半分が人間で、自分は「片子」と呼ばれ、父親は鬼の頭で母親は日本人だと告げる。片子の案内で鬼の家に行き、女房に会う。男は女房を連れて帰ろうとするが、鬼は自分と勝負して勝つなら、と言って、餅食い競争、木切競争、酒飲み競争をいどむ。すべて片子の助けによって男が勝ち、鬼が酒に酔いつぶれているうちに、三人は舟で逃げ出す。気付いた鬼は海水を飲み、舟を吸い寄せようとする。このときも片子の知恵で鬼を笑わせ、水を吐き出させたので、三人は無事に日本に帰る。片子はその後、「鬼子」と呼ばれ誰も相手にしてくれず、

日本に居づらくなる。そこで両親に、「自分が死ぬと、鬼のほうの体を細かく切って串刺しにし、戸口に刺しておくと鬼が怖がって家の中にははいってこないだろう。それでも駄目だったら、目玉めがけて石をぶつけるように」、と言い残してケヤキの木のてっぺんから投身自殺をする。母親は泣き泣き片子の言ったとおりにしておくと、鬼が来て「自分の子どもを串刺しにするとは、日本の女はひどい奴だ」とくやしがる。そして、裏口にまわって、そこを壊してはいってくるが、片子の両親は石を投げ、鬼は逃げる。それからというものは、節分には片子の代わりに田作りを串刺しにして豆を撒くようになった。」（宮城県仙台市）

以上が片子の話であるが、片子は鬼と日本女性の間に生まれた身体の左と右半分がそれぞれ半人半鬼の子どもであり、鬼ヶ島から親を助け日本に帰るものの、誰にも相手にされず居辛くなり、最後は自分の身体を犠牲にして親を鬼から守り、自殺している。河合（1994b）が指摘するように、片子が親を鬼ヶ島から助ける等、「良い事」をしているにも関わらず死ななければならない点も特徴的である。河合は全国の片子の話を調べ、片子が日本で葛藤を感じない場合は幸せな結末を迎えるが、半人半鬼性が問題になると、ほとんどが死で終わり、その事に強い衝撃を受けたと述べている。次に河合が挙げた片子の死で終わる例を示す。**【事例 2】**子どもは帰って人間と一緒に住めないといって海に身を投じて死ぬ（奄美大島）。**【事例 3】**子は母を助けると消えてしまう（新潟市栃尾市）。**【事例 4】**小綱は成長して人間が食いたくなり、小屋を作って入り自ら焼け死ぬ。その灰から虻蚊ができて人間の生き血を吸うようになる（岩手県遠野市）（以上、関敬吾「日本昔話大成」）。**【事例 5】**片子の名は幸助と言い、大きくなると「お母さん、なんだかこの頃、人が食いたくて我慢できないから、俺を瓶の中に入れて庭の隅に埋めてくれ。そして三年経ったら掘り返して欲しい」と頼み、母親は泣く泣く埋め、3 年後に掘り返すと銭となっている。（宮城）[1]このように片子が日本で居辛さを感じた場合、話は片子の死で終わるが、昔話では片子は自分が感じる居辛さについてはあまり語らずただ死に行き、河合も片子の居辛さと死との結びつきをあまり論じていない。

2．事　　例

河合（1994b）は片子について論じる際、片子の鬼を父性（一神教・牧畜民型）優位の西洋文化、人間の部分を母性（多神教・農耕民型）優位の日本文化と捉え、現代の片子として幼少期に海外に育った米国からの帰国子女[2]の存在を挙げている。次に河合の論に従い米国からの帰国子女について述べた大沢（1986）の 2 事例を取り上げ、片子の日本での居辛さを考察する。

【事例 A　アキラ】アキラは 5 ～ 14 歳までの 9 年間、米国に在住し、日本の公立中学に入る。アキラは当初から担任の眼を見て握手したり、廊下を大股で歩く等、かなり米国文化の強い影響を受けた子であった。教師の配慮でクラスでの自己紹介を英語でする事になるが、誰も聞かず、クラスに静かにして欲しいと伝えるが「アメリカ人が怒ってるぜ」と取り合う者はいなかった。アキラは日本に適応しようと努力し、クラスで教科書を読むが、周囲に「アメリカ人に読めるかよ」と苛立たれる。また、米国の授業でのように自分の見解を積極的に述べるが、アキラは自分がクラスで発言する度に周りに「ガクッ」と言われ事に気付く。「ぼくがなにか言う

と、必ずクラスのみんなが『ガクッ』と言うのですけど、ガクッって何ですか？」と聞くと、誰かに「はずれてるってことさ」と返される。アキラは「アメリカの学校には、みんなが守るルールがありました。－中略－だれも自分の意見を述べる権利を持っています。だれ一人として、それを笑ったりバカにしたりできません」と言うが、誰かの「関係ねえだろ！」という怒声が響くだけであった。その後、授業で教師の質問に手を挙げても、存在しないかのように扱われ、授業の流れや空気を無視する存在として教師やクラス全体から疎まれ次第に居辛くなっていく。また、誰もアキラと友達になりたがらず、複数の男子に見えない場所で手の甲にタバコを押しつけられ、自転車を分解される等イジメは激しさを増し、激しい頭痛や離人感が強まっていく。ある時、男子に更衣室に押し込まれ、ペンのキャップを肛門に突っ込まれ流血する事件が起きる。その後、目が見えない、歩行困難等の心因性の身体症状を呈する。アキラは「人間にはガマンしていいことと、ガマンしてはいけないことがある」と学校に行かない事を決意する。

【考察】アキラは日本の学校や文化に適応しようと努力するが、クラスに冷たく反応をされ、陰湿なイジメに遭っている。アキラは本人なりに日本に適応しようと米国でやったようにクラスで積極的に発言しているが、それが余りにも場の空気や流れを読まない為に鬱陶しがられ、排除されている。これはどのように考えられるであろうか。まず、アキラの積極的に発言する姿勢は、米国的な文化・教育・宗教性が深く関与していると考えられる。米国では個人の意見を尊重する土壌があるが、その一方で各自が自分の才能や感性、思考を「個人の責任」において見つけ、育む事を求める厳しい側面がある。そのような環境の中で幼少期に米国で育ったアキラは米国的な自我の強さを獲得する事が求められ、米国の教育・宗教観によりアキラの人格の骨格や土台が育まれたと思われる。アキラはクラスの冷笑的な態度に対し米国では皆自分の意見を述べる「権利」を主張しているが、この概念は一神教に基盤を持つ宗教性の強い概念[3)]であり、米国文化がアキラの人格の根っこに深く染み込んでいる事を示している。恐らく、アキラがクラスの中で個人の責任において主体的に考え、発言しない事は不自然で耐え難い事であり、日本の沈黙に屈し、場の空気を読む事は米国文化に育まれた自我や人格を深い次元で否定することに等しいと思われる。しかし、皮肉な事にアキラが米国式に日本に適応しようと頑張れば頑張る程、自分なりに良いことをしようとすればする程、全体の動きを読み場の均衡に配慮しつつ徐々に自分を出す日本文化では疎まれ、居辛くなっている。これは河合（1994b）の、「欧米型の父性の侵入対する、日本人の母性的一体感による無言の排除の姿勢」といえ、片子が何も悪い事をせず、本人としては「良い事」をしているのに次第に孤立・自殺に追い込まれる点と類似している。また、アキラが男性である事もイジメの大きな要因として考えられる。河合（1994b）は日本の異類婚姻において、異類女房は殺害されずに去る事が多いが、異類婿がしばしば殺害・排除されると述べているが、これは農耕民的な場の一体感が根底にある母性的な日本文化が、牧畜型の一神教的父性を排し、その母性優位を保ってきている事を示している。

また、片子は人間（日本人）と異類（鬼）から成るが、その人間の部分が男性である場合、それが鬼の父性文化と強く結合し、片子の人格により深く根付く可能性がある。アキラの場合も、米国の一神教に基づく強い男性性がアキラの男性性（男の子らしさ）と深く結びつき、そ

れが異質で危険な存在として日本人に認知され、アキラへの強い嫌悪感と排除に繋がった可能性がある。アキラは周囲に「アメリカ人が怒ってるぜ」と言われたり、教科書を読む際に「アメリカ人に読めるかよ」と言われているが、アキラの米国的な在り方（つまり鬼の面）が、日本人に「異なる」と意識され、排除されている。これは【事例 1】で片子が日本人により「鬼子」と呼ばれ、片子の鬼の面にのみ焦点が当てられ、同じ人間であるにも関わらず片子の非人間的・否定的な側面が強調されている事にも通じる。

【事例 B、麻衣子】 中学生の麻衣子は両親の都合で、一人先に米国から日本に帰国し、日本で生活を始める。学校では教師の英語の不自然さを指摘すると冷たい眼で見られ、テストで米国では一般的な英語表現を誤答にされた事を根拠を挙げて冷静に教師と話し合おうとするが、「このテストは実力テストではありません。私の授業にどれだけ素直に耳を傾けたか、を見るテストです」と取り合ってもらえず次第にクラスに居づらくなる。クラスでは、英語の宿題を同級生の女子に強引に奪われ写されるが、麻衣子は宿題を写すだけでは学力にならないと、早朝に登校するので一緒に勉強する事を提案し、一人で登校するが、誰も来ず孤立していく。そして、英語の宿題を見せなかった事がきっかけとなり、その女子グループに机にゴミを入れられ、絵を盗まれ、ナイフで刻まれて捨てられるイジメに遭う。また、女子集団に勝手にゴミ捨て当番を命じられ、理由を聞くと、「あたしたちが決めたんだ。友だち甲斐のない変な日本人（ジャパニーズ）、つまりヘンジャパのあんたにはこれくらいのことやらせなきゃって、みんなで決めたんだ」言われる。その後、彼女は拒食症になり、生理が止まり入院を余議なくされる。

【考察】麻衣子は現地で体得した英語を使い教師に疎まられ、クラスに「居づらく」なっている。日本の授業で重要なのは英語がどれだけ「正しい」かではなく、教師を中心とする場の一体感に場の成員がどれだけ「素直に耳を傾けたか」が重要なのである。また、麻衣子は女子の集団に英語の宿題を強引に取られ、写されているが、彼女は怒らずに一緒に勉強しようと提案し、場に飲み込まれず、「自分」なりに主体的に考え、行動している。しかし、逆にこれが女子の気に触り、イジメられるきっかけになっている。麻衣子は女子の言い分もしっかりと聞き日本文化の重要な構成要素である関係性を汲む事が出来た上で、自分なりに考えて具体案を出して適応しようとしているが、この事が逆にイジメの大きな要因と思われる。ある時、麻衣子の学校に白人の女子が留学し、日本の誰もが友達になりたがり、その白人は日本人に好印象を持って帰国し、麻衣子は日本人は海外からの外国人（白人）には友好的だが、「海外から帰って来た日本人に対して閉鎖的」という。そして、自分が「目の色が青くなって、髪もブロンドに変わって、日本語ヘタになり英語なまり」で話すと「いまよりずっと楽に、この日本で生きられるかもしれない」と述べている。

麻衣子も白人同様、英語を話し、米国文化も相当深く根付いていると考えられるが、日本人には排除されている。日本人は外見が白人であれば、外国人を最初から自分達と「異なる存在」として相手を異化し、接するが、麻衣子は自分達と「同じように」、日本語を話し、日本文化に馴染んでおり、ほとんど自分達と同じ存在という前提のもとに生活している。そして、日本人は麻衣子も場の均衡を前提とする自我構造を有し、それ相応の言動を取る事を無意識的に期待し、両者の間に場の一体性が生まれるが、そこに突然、麻衣子の合理的な米国文化に基づく

言動が出ると、それまで自分達と同じと思っていた日本人の文化的同一性が根底において揺るがされ、自分達の同一性（場の均衡）を保つ為に、深く自己内に入り込んだその異分子を排除しようとする動きが生じるのである。つまり、麻衣子は日本人にとり白人のように自分達から切り離し、外国人として対象化できる存在ではなく、むしろ非常に近い存在として認知され、接せられるが為に、麻衣子も日本人も互いに深く傷つくといえる。帰国子女は一般に、場の雰囲気や場の均衡を読めず、「異なる」意見を主張する存在である為に、排除されているかのように理解されるが、帰国子女は日本人と「異なるから」排除されるのではなく、むしろ場の一体感を重視する日本文化という「同質性」と異文化という「差異性」を「同時に」有している為に一層強く排除されるのである。片子も半分が日本人であるが為に日本人と親和的な関係性を有し、最初から異分子として見られていない。片子の鬼の部分は「縦」に人間と結合している為に、異類の要素を持ちながらも完全に鬼や異類として分化・分類される事が困難で、人間の要素を見て取れるのであろう。麻衣子がイジメの際に感じた息苦しさや居づらさ、そして日本のクラスメイトが麻衣子に感じた違和感は相当なものであったと思われる。麻衣子の自分が白人だったらという言葉は、自分が白人なら日本人が自分と適切な距離を取り、自分の米国的な部分を尊重してもらえるという願いでもあるだろう。

また麻衣子は同級生により「変な日本人（ジャパニーズ）、ヘンジャパ」と呼ばれ、麻衣子が有する日本と米国の片側性が歪な形で強調されている。この呼び名は日本語と英語（ジャパニーズ）が混在し、言語的にも思考的にも一貫していない。そこには差別的なニュアンスと共に、日本人が麻衣子という自分達を不安にさせる存在に出会った混乱が見られる。つまり、日本と米国の両方の文化原理が人格に根ざした麻衣子という存在に出会った事で、同級生の文化的同一性が揺らぎ、自分達の安定を保つ為に自分達が麻衣子をコントロールしやすい名前を付けたと考えられる。これは後に登場する【事例 7】で片子が日本人でも鬼でもない「片」と呼ばれ、日本と鬼をいずれも「半分」、「片方」しか有さない中途半端な存在として見られている事にも通じる。アキラも麻衣子も日本と米国の「両方」を有しているにも関わらず、日本人にはアキラが親和性のない「鬼子」として呼ばれていることも興味深い。[4)]人の呼び名は、呼び手と呼ばれる人間の相互の意識・無意識的な関係性を表す鏡であると考えられるが、片子の鬼の面のみが日本人に否定的に体験されるような関係である場合、片子や帰国子女が、鬼と人間の両方を生きている事が無視・否定され、その両面性が存在する場を失い、相当な居辛さを感じているといえる。

さて、帰国子女の 2 事例では両方とも場から排除される形でその米国的側面が否定されており、いじめによる心的外傷を受けたと考えられるが、これらは心の深い層で生じていることと思われる。つまり、帰国子女を排除する動きは、現実の日本社会（世界）で起きているものではあるが、帰国子女の場合、日本と米国の文化原理の両方が人格に根付き、鬼と人間の心性が不可分な形で結合している為、日本の文化原理が異分子を排除・殺害する動きは、帰国子女自身の内面にも生じているのである。言い換えると、帰国子女や片子に根付いた日本文化が自身の内面の米国的（鬼的）文化を裂き、それは片子の心と身体の死に繋がっているといえる。このように、無意識に生じる文化による分裂の動きを食い止めるには、本人の意識的努力が必要だが、1 人の人間に異なる 2 つの文化原理を生きる事を理解する事は周囲には分かり辛く困難な作業といえる。

３．話の結末

これまで片子の居辛さについて帰国子女の事例をもとに述べてきたが、次に片子について考えたい。【事例 4】では、人間が食いたくて仕方のない片子が自分の死体の「鬼の方」を鬼退治に使うよう言い残し自殺している。片子は日本で自分の鬼性を否定され、日本に強い怒りを感じているはずだが、自分の鬼性を守る為に戦わず、日本へ向けるべき怒りや攻撃性を抑圧し、怒りの矛先を自分に向け、自死という強い否定の形を取っている。片子は自分に根付いた鬼性を生かす必要があるが、それを強い日本的意識で押し込めた為に、片子の内面で鬼性が日常的に幾度となく否定され、生きる場を求めて暴れ、「人間が食いたくて仕方がない」という狂気に繋がったのではないだろうか。そして、片子の中では母性的な日本文化が優位な為、日本の母性を最後まで守る為に自殺した可能性がある。

【事例 1】の片子は、鬼ヶ島から脱出する際、本来であれば血縁関係のない日本の男性を助ける必要はない。しかし、ここでは日本の母、つまり「母性」を救う為に男性の手助けをしている。そして最後に自分の体の鬼の部分を切り刻んで串刺しにし、玄関に吊るすよう助言し、鬼の親や日本への侵入を防ぐ為に自殺している。これは自分の鬼性の強い否定を通した「鬼退治」といえるがここでも片子は最期まで日本人の味方であり、母子一体性に基づく自己犠牲的な性格が特徴的である。片子はなぜ自分の死体を鬼に見せ付ける事で鬼に恐怖を植え付ける事を知っていたのだろうか。これは、片子が、生活の中で日本の母性により自分の鬼性を強く否定され、故に日本の母性の残虐性を熟知し、鬼の弱点を自分の身を通して熟知していた為と思われる。つまり、片子が八つ裂きにされ串刺しにされる姿は、片子自身が日本文化（母性）により受けた傷ともいえ、自分の傷を鬼の父に見せつける事で、日本人女性（母性）の恐ろしさを植え付けている。つまり、片子は自身の死により初めてそれまで不可視だった片子の傷が現前化したといえる。

次に結末が死で終わらないものを見ると【事例 6】「鬼の子子綱」では３人が家に帰り、片子の自殺は生じず、話はそのまま終わるが、片子が鬼と人間との間に生まれた葛藤は、全く触れられていない。【事例 7】片子は上半身が鬼で下半身は人間に分かれ、角が生えているために家に入れない。しかし、正月に門松のおさえにしている棒で角をこするともげる。（宮城県伊具群）。【事例 6】では鬼の文化が片子に全く合わず、片子が日本に違和感なく根付いたとも考えられる。【事例 7】では片子は鬼の為に家に入れなかったが、角がもげた為に家に入れたが、片子が角という鬼や男性性の象徴を断念し、日本の「イエ」に同化したと考えらえる。また、この片子は左右ではなく「上下」で鬼と人間に分かれているが、角が取れた事により上半身がより人間に近づいた為に下半身の人間とのつながりを持ち、死に至らず統一体を保てられたとも考えられる。しかし、角の喪失は鬼性の部分的な死と日本への同化を示唆しており、片子の上半身が角以外、鬼のままだとすると、今後も何かしらの葛藤を持ち続ける可能性がある。【事例 8】片（子どもの名前）は、半分鬼なので日本で暮らせないので父のところに帰る（宮城県登米郡）。ここで、片子は日本に適応しようとしたものの「鬼（父）の国」に帰っている。これは、母性の強い日本に自分のアイデンティティの基盤を構築できずに自分の人格に根付き、自分の基盤である鬼の心性を守る為に帰ったとも考えられる。これは帰国子女の中に日本に住

むものの、個人の意見を尊重しない日本文化のあり方に耐え切れずに、かつて滞在した文化圏に帰る者が実際にいる事を考えると興味深い話である。自殺に至らない片子は、日本で違和感なく過ごす【事例 6】、同化するパターン【事例 7】や葛藤を感じた為に、自分の鬼の心性を生かす為に鬼の国へ帰るパターンがある【事例 8】。【事例 7】、【事例 8】は、片子がどちらか一方の文化に土台を求めている点に特徴があり、特に【事例 8】は自分の鬼性や個性を鑑みた上で鬼の国に帰ったとすれば、日本ではなく自分の鬼性を優先したと考えられる。しかし、いずれの話も片子のその後については述べられておらず、鬼か人間の「一方だけ」が優勢になり、もう片方の部分が蔑ろにされる危険性も不問にされ葛藤の真の解決とは言い難い。さて、自殺する片子は自分の鬼性を無視して自己のアイデンティティの基盤を日本にのみ持とうとし過ぎた為に無理が生じ、生き残った片子も日本か鬼のどちらか一方の文化に基盤を求めているが、これは人間が本来、一つの文化に根付くのが自然であり両方の文化に根付く事の難しさを示しているのではないだろうか。片子の苦悩の質を考えると、どちらの文化が人格の基盤になり、片子の自我や個性が根付いているかが問題になると考えられる。河合（2000）は子どもには 2 つの文化で育つ事に適さない子どももおり、子どもの個性を無視して 2 文化・2 言語で育てた場合、場合によっては統合失調症に比する精神的病を背負う者もいるとし、子どもの個性を見極める必要性を指摘している事にも通じるといえる。

３．１　片子の子ども性と死

ここで片子が自殺した年齢を見ると、片子は 10 歳あたりで自殺し、「子ども」のまま死んでいる。この年齢は子どもから大人へ移行する直前であるが、これはどのように考えられるだろうか。Erikson（1981b）は人間は思春期において両親や環境への「初期の同一化が以前に考えていたほど、有効で望ましいものかどうか疑いはじめる」とし、思春期に自分を育んだ世界を子ども時代のように取り込む事をやめ、逆にそれに反抗し、強く否定する中で自分の核を作る過程に入るとしている。つまり、人間は自分を育んだ世界を思春期に強い否定を通して自我を形成するといえる。しかし、片子は幼い頃から 10 歳まで鬼と人間の母に二重に育てられ、常に 2 つの文化を生き、両方に配慮しなければならず、どちらか一方に定まらないまま根付かなければならず、心理的土台が不安定で自我に独特の脆弱性を有している危険性がある。思春期に重篤な精神疾患が多発することからも、強い否定による自己の核の形成は危険な過程であり、相当な心理的負荷が掛かるものである。つまり片子の場合、脆弱な自我基盤のまま、思春期に自分を育てた互いに相容れない異なる 2 つの文化原理を一つの世界に統合し、自我やそれを支える基盤を形成しなければならないという課題を背負っている。前思春期は、親友を作る（Sullivan、1976）と同時に深い絶望感を感じる時期（伊藤、2006）でもあり、片子の自殺は思春期に自己や二つの世界を再構築し、統合する事が困難であることへの絶望感とも考えられる。

また、思春期に人間は心理･身体的に変化し、男性･女性という性が区別される時期であるが、片子が 2 つ文化原理をつなぎ合わせた両性具有性を有する「子ども」である事を考えると、思春期に片子の性が分化し､「一つ」の性を有した「人間」になると､片子の両性具有性が分化し、もう片方の死、つまり、片子の「存在の死」を意味するとも言える。河合（1994）は西洋型の

殺害による変容のパターンが半人半鬼の片子には通じないとしているが、これは父性原理に基づく切断機能による変容が強過ぎると、片子が真っ二つに切断され、片子の人間と鬼の死に繋がる為と思われる。このように片子は思春期までに心理的に多くの困難を抱え、思春期を経て一つの安定した文化において大人になれず、二つの世界を抱えた「子ども」のままで死を迎えざるを得ないと思われる。このように片子には常に死が付きまとう存在であるが、では、片子が生き残るにはどのような可能性が考えられるだろうか。次にこの事について考えてみたい。

４．　片子が生きる可能性　片子の周りの人々

片子の話【事例 1】では、鬼が樵にあんこ餅をやる代わりに嫁が欲しいと「条件」を出し、樵はそれを承諾し、鬼は嫁を鬼ヶ島に連れて帰っている。樵にしてみればまさか、自分が言った言葉が鬼により本当に実行に移されるとは思ってもみなかったであろう。しかし、鬼は自分が樵と交わした「言葉」や「約束」を守り相手もそれを承諾し、鬼からすれば約束を遂行しただけで悪い事をした意識はないと思われる。これは、場に規定されず、個人対個人の言語によるやりとりや、契約を重要しするキリスト教（セム的一神教）から派生した文化圏のあり方とも考えられ、そのような文化ではこれは極めて「人間的」な行為である。人の嫁を取るという問題は無論あるが、鬼は無理矢理奪っているのではなく人間に条件を出しているのであり、もし、樵が鬼が出した条件が嫌なら断ればよいだけの話である。しかし、樵の眼には言葉での契約を重視し、契約を周囲の私情を挟まずに貫徹する行為は、非人間的で冷血な「鬼」に映っているといえる。

また、片子は親に自殺する前に、自分が死んだら、自分の体の鬼の部分を切り刻み、串刺しにして戸口に刺すと鬼退治になると言い残し、投身自殺をしている。日本の親は片子が自殺する事を悲しむが、片子の自殺を止めず、母親は泣く泣く片子の遺言通りに切り刻み、串刺しにしている。片子と嫁を取り返しに来た鬼は我が子の姿を見て「自分の子どもを串刺しにするとは、日本の女はひどい奴だ」と悔しがっている。これは鬼の眼には、どのように映ったのであろうか。鬼の眼からすれば、子どもと嫁を取り返しにやって来たものの、いきなり自分の子ども鬼の部分だけが切り刻まれて串刺しにされ、玄関に吊るされているのは、全く了解不可能な事で、その光景は恐怖以外の何物でもないであろう。また、親でありながら、自分の子どもの命を守らず、自分達の保身の為に、子どもを犠牲にする事を許容する日本のあり方は、鬼には人畜以下の「畜生」や「鬼」に体験されるのではないだろうか。

河合（1994b）は日本の親は子どもの死を耐え忍ぶ強さはあるが、社会を敵に回して戦ったり、自殺を止める強さがなく、日本の母性文化全体を問題にしている。確かに日本の両親はただただ一連の悲劇に染まり、自分達の母性的な日本文化の動きを自覚せず、我が子を守る強さは身に付けないまま話は終わっている。上の例では片方が自分達にとって「人間的」と思って取った行為が､相手には非人間的なものに体験されているのが特徴的である｡人間と鬼は｢互い｣を残酷な存在として見ているが、重要なのは相手が野蛮で危険な存在と感じられた時には、相手が野蛮なのではなく、それが自分の世界観の構成原理、そして相手との関係性によるものと気付く事と思われる。つまり、自分の文化や人間のあり方は絶対ではなくあくまでも「相対的

なもの」であり、自分の存在・行為がもう一つの世界や他者に同時に繋がっている二重性に気付く必要がある。しかし、通常、人間に深く根付いた文化や自身のあり方の多くは無意識的になりそこに相対性をもたらす事は困難である。だが、人間が自分自身を知るには自分と根本的に異なる「他者」を必要とする事からも、人間は鬼や鬼畜にしか見えない鬼や片子の鬼の部分やその残虐な行為から眼を背けずに対峙し続け、相手の眼には自分がどのように体験されているかを意識する必要がある。言い換えると自分と他者との対話を通して、相互の世界を支える構成原理（コスモロジー）や人間的な部分を「互いに」見つけ出す必要がある。そこで生まれる様々な気付きが両性具有的で子どものまま死を迎える片子に対する姿勢にも反映されると思われる。しかし、これは日本的母性と一神教的父性という本来的には結合しないものが両性具有的な片子という存在を通して互いが向き合う事を意味する。そもそも日本の異類婚では、母性原理の日本文化と牧畜型の一神教的父性原理に基づく異類婿の結合が常に回避され、（河合、1994b）文化的一貫性を破壊する異類や両方の要素を有する子どもの生誕を回避してきた。この事からも、鬼と人間の対話は自分や自文化の否定的な部分（影）と対峙し再構成する事は、互いの世界の構成原理を根本から問い直す危険な作業である。

ここで片子が生まれた経緯を見ると、片子を単純に鬼の父と日本の女性の結合により生まれたと見る事ができるが、樵の夫があんこもち欲しさに鬼と安易に契約を結び、嫁を鬼に渡した為に鬼と日本女性の間に片子が生まれている。つまり、片子は日本の父性の「弱さ」故に生まれ、鬼と母、そして日本の父の弱さが凝縮・結晶化した存在である。故に日本の父親にとり、片子は自分とは無関係な存在ではなく、自分自身の弱さ（母性優位の文化における男性性の弱さ）の結晶であり、自分と深い繋がりがある。しかし、父性の弱さは日本の父親だけの問題ではなく、日本の母性に最期まで自己犠牲的に尽くし、母子の強い結び付きの中で死ぬ片子の問題でもある。つまり、片子も母性優位の文化における父性の相対的な弱さを有しており、日本の父性の弱さは、片子自身が向き合わなければならない課題でもある。このように日本の父とその子どもである片子は共通した課題を抱え、互いに切り離せられず日本の父と母、そして鬼の生き方は、両者の影響を深く受け継いでいる片子の生と死に呼応しているのである。この意味で、日本の父親が日本の母性優位の文化の否定的側面と対峙し、自分の父性の弱さと向き合う事は、片子の中の弱い父性にも働き掛ける可能性がある。このように人間、そして鬼が自文化の強さと弱さに向き合い、生き方を巡って葛藤する事で片子の中の分裂の動きを少なくとも食い止められ、片子自身が生きやすくなる土壌が生成される可能性がある。このように片子は日本人や鬼の一定の世界観や拠って立つ足場を崩す存在であると同時に、自文化の価値が絶対ではないという相対的観点をもたらし、周囲の世界全体を巻き込んだ変容を可能にする潜在性を有しているともいえる。

５．１　片子が生きる可能性　片子自身の生き方

さてこれまで、片子が生きる可能性について片子の周りの存在による努力が必要である事を述べたが、片子自身の生き方にはいかなるものが考えられるだろうか。河合（1994b）は西洋型の変容を遂げるパターンが困難であり片子が常に死に近い存在であり、片子が生み出すファンタジーを大事にする事を説いて論を終えているが、その詳細については述べていない。では、

ここで米国に植民地化され、世界観を破壊されたネイティブ・アメリカンのスー族と、スー族のある女子の事例を元に片子が生きる可能性について考察したい。

５．２　ネイティブ・アメリカンの事例

E.H.Erikson（1977a）は米国のネイティブ・アメリカンのスー族を対象に現地調査を行っている。スー族は野牛狩りを行っていた部族であり、野牛の体から食物・衣類・住居等あらゆるものを作り出していた。野牛は子どもの遊びや、神話･儀式で褒め称えられ、彼らの言い伝えに、野牛が死ぬと自分達も死ぬというものがある程、野牛はスー族の生活と共にあり、世界そのものであった。しかし、白人の入植が始まると、これらの野牛は「遊び半分に愚かにも幾十万頭」殺され、最後には絶滅し、スー族の野牛と共に営む生活や文化、そして精神も土台を失い、滅んだ。そして、スー族は白人との戦争に負け、白人がもたらした生活様式により彼らの伝統的な生活はさらに破壊されていく。それまでスー族には物を部族で共有し助け合う文化があり、個人が何かを貯蓄する事は卑しい行為であった。しかし、白人の貨幣経済の導入により、人々は貯蓄を始め、伝統的な人間関係や共同体は崩壊していったが、金の使い方に慣れていないスー族の多くの者は破産し、アルコール中毒になり米国式の生活に馴染めない者が多かった。また、スー族は産後に臍の緒を草原に吊るす等、人体を自然に返す風習があり、彼らは人間が自然を統治するのではなく、自然それ自体に神聖なものが存在するという世界観や宗教を生きていたが、白人の自然科学的な発想に基づく衛生概念により、これらの風習は淘汰されていった。白人の強力な自然科学的世界観は、スー族の生活だけではなく、彼らの精神的支柱であった世界観、宗教性、そして文化を復元不可能な程、徹底的に破壊し、スー族は自分の魂を失う程の打撃を受けたのである。このような状況で慢性的な貧困や無関心状態に陥る者が後を絶たなかった。

このような中で、白人の影響はスー族の子ども達にも及び、子ども達は「文字通りさらわれて、無理に政府の学校へ入れられた。頭髪は刈られ、インディアンの衣服ははぎとられた。自分たちの土語を話すことも禁じられた。－中略－自分たちの古い習慣にあくまでも固執しようとした子どもや、逃出して連戻された子どもは獄へ入れられた」という。Erikson はこの中で家族から引き離された「特に悲劇的な」女子の一例を挙げている。その女子は白人の学校に入れられると、臭くないにも関わらず、白人教師から耐え難い「臭い」を発する存在として扱われ、「自分が『不潔である』」と認識させられたという。そして学校で米国の身だしなみや「清潔や身体の衛生」を教え込まれ、白人女性が享受する「自由」を与えられる等、かなり米国の価値観を植えつけられたが、女子は米国文化には完全に同化する事はなかったという。その後、思春期に故郷に帰るが今度は、月経時に特定の食べ物に触れない部族の伝統的な儀式をしなかった為に、祖母や母親から、『不潔な女』として扱われてしまった。一度、米国の価値観が根付いた女性にとり、女性を不当に扱う儀式への参加は屈辱的でそこでの生活も耐え難くなるが、かといって、米国的な生活を送る基盤も意欲もなく、どちらの世界にも属せない状態になってしまったという。

【考察】この女子は、小さい頃に親元から引き離され、白人から臭いという投影を受けて自分のそれまでの存在や自文化が強く否定され、米国式の生活を身に付けさせられるが、思春期

には故郷で月経の儀式を受けていない為に「不潔な女」と忌み嫌われている。月経は子どもが身体・心理的に大人の女性になる重要な時期であり、部族が思春期に儀式を行う事は、女性を部族の秩序や世界観に位置づける事である。しかし、この女子は部族の世界観や秩序を損なう不潔で異質な存在として排除され、女子が感じた疎外感や否定された感情は生理・心理・社会的なものに根付いている分、相当、根深いといえる。また、米国の教育により権利意識が埋め込まれた為に、女子にとり部族で行う月経時の「非合理的」で「差別的な」儀式に参加する事はもはや耐え難いものになっていたと思われる。子どもはしつけや遊びにより周囲の世界や文化を自己内に深く吸収し、その文化の価値観や世界観は人間の意識や無意識に深く根付き、成人になっても永続的に作用すると考えられる。しかし、幼少期に２つの文化で育った場合、人間は恒常的に自分に作用する価値観や世界観を二つ自己内に抱える事になり、根深い葛藤を生み出す危険性がある。この女子は両方の世界から「汚い」、「不潔」と存在が２重に否定されているが、皮肉な事に両方を深く取り入れたが故に、どこの世界にも所属できず、生きる土台を定められない根源的な不安を一生抱えねばならないのである。これは、子どもであるが故に生じる苦悩・葛藤であり、２つの世界の狭間で生きるネイティブ・アメリカンの女子の葛藤は片子同様、深く、容易に解決できないものといえる。

６．片子の「アイデンティティ」

さて、スー族の女子も片子も両方とも「子ども」であるが為に生まれた悲劇であるが、片子も女子もどちらの世界でも全うに生きられず、大人になれない中途半端な存在なのであろうか。この事を片子のアイデンティティの視点から考察する。一般にアイデンティティは「アイデンティティの確立」というように安定し、肯定的なものとして理解される事が多い。確かに3.1で述べたように人間は思春期を経て比較的安定した世界を形成するのであるから、この意味で片子やスー族の女子は、両親や自分の文化という所与のものを失い、一つの世界を確立できず拠って立つ「アイデンティティ」を永遠に喪失した状態である。しかし、アイデンティティの概念を提唱したErikson（1981b）は、「アイデンティティの感覚は肯定的と否定的との両方の要素から成り立っている」とし、「（否定的なものを含む）すべて以前の同一化［自分にとって重要な影響力を有する人との一体感または同一視］や自己像の統合を意味」し、「以前の同一化すべてを再構成する過程」としている。つまり、アイデンティティは一つの安定した世界ではなく、むしろ自分を育んだ世界に完全に埋没せずに、自分がその世界でそれまで肯定的・否定的と捉えてきたものを自分の全存在を賭けて再構成していく過程である。片子もまた鬼や人間のように「一つ」の世界を形成する志向性はあるが、半人半鬼である為に完全な鬼や人間になる事は不可能で、一つの安定した世界を構築できず、どちらにも属せず、存在自体がEriksonの言うアイデンティティの概念を体現している。つまり、片子は一見、どちらの世界でも安住できない子どもであるが、逆に２つの世界に深く関わりながらも、どこにも埋没しないからこそ多くの可能性を含んでいる。片子とスー族の女子も、それぞれ二つの世界の望まない接触・結合により生まれ、両方の世界に生きた為に、両方の世界を破壊する異質な存在として排除されている。そして、自分の存在の自明性を失い、自分が誰の子どもで、そもそもなぜ

生まれてきたのか等と自分の存在を深いレベルで問う宿命を背負い、どこにも属せない「孤独」を生きなければならない。つまり、片子は子どもとしてどちらの世界にも安住できず、あくまでも集団や文化に埋没しない「個」として深い孤独を抱えながら自分の世界を構築しなければならない。言い換えると２つの文化の要素を受け継いだ片子が一つの文化や価値体系に埋没しないからこそ、他にはない創造的な「個」としての生き方が可能である。このような孤独や個の観点、そして「子ども」であるという事は鬼や人間にはない片子のアイデンティティの重要な構成部分であり、それをそれぞれの片子が独自のやり方で深める事が片子が生き残る可能性の一つと思われる。

米国のスー族と片子の話を比較すると前者は白人の価値観や文化原理がスー族の共同体に侵入し、その宗教や世界を破壊し、両者が深い次元で衝突しているのに対して、片子では人間と鬼が出会うが基本的に両者の文化接触は深い次元で生じていない。スー族は、生活・文化基盤が破壊され、悲劇と言う他ないが、これを悲劇で終わらせない為には何が必要であろうか。Erikson（1981b）は、米国移民の第一世代は自分たちがどこから来たのかを知っているが、それ以降の世代は自分たちどこから来たのかを自ら探し求めていく必要性を指摘している。つまり、移民国家の米国の「未来」を考えた場合、全ての人間にとり、自分が何者であり、どこに根付くかというアイデンティティの問題は切実な課題である。そこには時代の要請や、歴史性が働いている。スー族の女子は、両親や母文化との一体性を失い、植民地化の影を背負い、生き辛さを生涯、抱えなければならず、いつの時代も社会や時代の皺寄せは子どもに行くものである。しかし、スー族の女子はどちらかの文化に埋没するのではなく、彼女自身が植民地化や文化の衰退という「歴史性」を背負いつつ、両方の文化を生かし、創造的な生き方を生み出す事も重要と思われる。片子の話には、時代の変化や歴史性の観点がないが、片子が歴史性を生きることは片子が生き残る上で重要である。しかし、連綿と受け継がれてきた日本の文化・歴史の中で、片子が生き、新たな物語を生み出す事は相当、困難である。片子やスー族の女子は子ども故に起きた悲劇であるが、子どもだからこそ未来や歴史、そして共同体に開けたアイデンティティを有している。死や狂気と隣り合わせの片子や子どもが生き残り、どのような「大人」になり、そこからどのような世界が生まれるかは、当事者一人一人の個性的な生き方に掛かっているといえる。

1）事例５に関して河合は銭が片子が意味あるものに変容した可能性があるが、間接的に片子の死を意味するとしている。
2）河合論文は1980年代に書かれ、帰国子女の赴任先は欧米圏が多かったが、その後の日本経済の変化に伴い、日本人家族の赴任先が南米・東南アジア・中国等と多様化し、帰国子女の心理的葛藤も多様化・複雑化している。帰国子女の滞在先、心理的葛藤は多様化している事に留意しつつ、本論文では主に米国からの帰国子女の葛藤について考察する。
3）才能 gift は神から人間に与えられたものという意味があり、「責任」responsibility（英），Verantwortung（独）は個人の神への返答、答えという意味が含まれている。この意味で米国の教育は宗教性に強く裏付けられた世界観であり、人間形成に深い影響を与えている。
4）これには、性差も関係している可能性もある。つまり、男性であればより強く米国的な父性優位の文化と結びつき、男性的な在り方が優位になるのに対し、女性であれば完全に米国の父性的な文化が優位にならず、やや母性的なあり方が優位になり、周囲や場への配慮が強くなると考えられる。

参考文献

伊藤良子 2006「青年期のクライエントが振り返る 10 歳のころ」臨床心理学 6 (4)、pp492-497 金剛出版
稲田浩ニ・小澤俊夫 1982 日本昔話通観 4　宮城、堂朋社
E.H. エリクソン　仁科弥生訳 1977a 幼児期と社会Ⅰ みすず書房 pp.45-46
E.H. エリクソン・R.I. エヴァンス　岡堂他訳　1981b エリクソンは語る：アイデンティティの心理学 新曜社　pp.39-45
大沢周子 1986 たったひとつの青い空　文藝春秋 * アキラは pp35-61、麻衣子は pp65-97 より
河合隼雄 1982a　昔話と日本人の心　岩波書店
河合隼雄 1994b 片側人間の悲劇　河合隼雄著作集第 8 巻・日本人の心　岩波書店　pp.300-319.
河合隼雄 2000c　未来への記憶―自伝の試み－（下）　岩波新書　pp.155-157
小松和彦 1987「異類婚姻の宇宙 -「鬼の子」と「片側人間」」へるめす第 10 号 岩波書店 pp.125-136
H.S.Sullivan　1976　現代精神医学の概念　みすず書房
関敬吾他編、『日本昔話大成』、全 12 巻、角川書店、1978-80 年
ロドニー・ニーダム、長島信弘訳 1982 「片側人間」、『現代思想』 年 8 月号、青土社 pp.42-61

（心理臨床学講座　博士後期課程 1 回生）
（受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日）

A Study on “Katago (Half man)” : An Examination of Kawai Hayao’s “The Tragedy of Half Man” and Katagos “Childness”

NISHIURA Taro

In this paper, the figure of "Katago" that appears in the tales of old Japan will be analyzed and the issue of the Japanese returnee students and the present Japanese culture will be discussed. Katago is a 10 year old boy born between a father who is an oni (Japanese ogre) and mother (Japanese) who was taken away by Oni to his country. Katago dedicates himself to bring his mother back to Japan and they finally succeed in returning to Japan. However, he finally commits suicide because of having difficulties living with Japanese people. According to Kawai(Kawai,1994), most of the stories where Katago suffers from his/her duality, being a ogre and a human at the same time, ends with his death. Kawai analyzes the "Katago" from a cultural and psychological perspective and he concludes although Katago's death is almost inevitable, it is the task of Japanese culture not letting the Katago die, as he entails indispensable elements to regenerate the Japanese culture. However, the following two points have not been sufficiently examined; The first point is "why" the Katago has trouble living in Japan. And the second point is what actually happens in the psyche of Katago that leads to his death. The third point is, what kind of possibilities exists that enable Katago to live. Hence, the three points have been examined and discussed on the basis of some case studies children raised up by two different cultures and societies.